

田中俊一氏 特別インタビュー

(2018年10月10日実施)



田中俊一 (たなか・しゅんいち)

前原子力規制委員会委員長

ニツ川章二 (ふたつかわ・しょうじ)

Isotope News 編集委員長 (聞き手)

ニツ川 原子力規制委員会委員長をご退任されてから、もう1年経ったわけですが、その後のご活躍状況を教えてください。

田中 2017年9月21日に退任して、ちょうど1年ちょっとになりました。

飯舘村の菅野村長から、こちらへ来てのんびりしたらいかがですかと言われ、立派にリフォームした家を貸してくれました。

山の中にあり隣の家まで100~200m離れていて、飯舘山荘と称して住んでいます。自宅は茨城の勝田にあって、半々ぐらいの生活です。いま飯舘村で携っているのは、1つは、除染をしたフレコンバッグの処理です。中間貯蔵に運ばず、帰還困難区域の長泥地区という行政区に土を埋めて、その上に覆土をして、良好な畑にする実証事業を環境省と一緒に始めたところです。

Csを含んだ土壌は、基本的にはCsは移動しませんので、余計なことをしないでそこに埋めればいいのです。長泥行政区は、水田の所有者が大勢おり住民会合が何度も行われ、2017年12月に環境省の伊藤忠彦環境省前副大臣、飯舘村長、それに長泥区長が実証事業の調印するところまで来て、そのあとずっと続けています。

長泥行政区は、私が3.11事故が起きたあと、5月に長泥区長宅等の除染をやって、一緒に飲んだり、

食べたりした長い付き合いで、気心が通じていたことが幸いでした。そういうことがないとたぶん難しいですね。

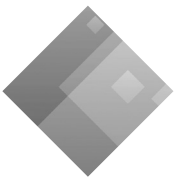
事業者も決まりましたので、やっと少しずつ動き出しました。まだ本格的にはいきませんが、フレコンバッグの搬入を始めています。

ニツ川 最終的には畑にするわけですか。

田中 そうです。谷あいには水田が160haぐらいあります。横に道路があって、そこから2~4mぐらい低くなっている湿田ですね。だから、あまりよい米はつくれないう。そこだけに限ったことではないのですが、避難が長引いて、農業を続ける意欲のある方は、極めて少なくなっています。実証事業はその土壌を改良して有効利用しようということです。飯舘村は、220万個のフレコンバッグがあります。一部大熊町、双葉町の間貯蔵施設にも運んでいますが、できるだけその地域で始末しようというものです。そのほうが安全性は高いし、お金の面でも合理的です。中間貯蔵施設での貯蔵は30年とし、それまでに県外に運び出すというのが国の約束ですが、とても実現できるとは思えません。

ニツ川 そうですね。

田中 だから、飯舘での実証実験はフレコンバッグの土壌の最終処分に繋がりますので大きな意義があります。安全性とか、実際にその土地で畑作物を



つくって大丈夫だということを示すことを環境省と一緒に取り組みます。それが、菅野村長から私への注文です。

もう1つは、子どもたちの教育です。できるだけいろいろな大学の先生とか有識者に来てもらって、中学生・小学生の関心のあるテーマについて、一流の先生から様々なことを学ぶ機会をつくることを狙っています。まだ、1回だけですが、天体の話を聞きたいという要望に応じて、早野先生（東京大学名誉教授）をお願いし特別授業を行いました。学校は毎年度、3月ぐらいにカリキュラムを決めるので、飛び込み的な特別授業をやるというのはなかなか難しいようで、期待したほどの実績はあがっていません。でも、葛尾村の中学校ですが、9月20日過ぎにシアトルまで修学旅行に行くというので、子どもと先生にDシャトルを持ってもらいました。葛尾村からシアトルへ行って戻ってくるまで、葛尾村、シアトルでの自然放射線量、X線による検査とか飛行機に乗っている間に線量が上がり、時間ごとに記録できますので、それをベースに授業をやることにしています。

その他で、1番気にしていることは、風評被害は物だけではなくて人に対する被害もあることです。事故時に福島に住んでいたということだけで差別があります。福島の人には来ないでくださいとか、来ても帰ってくださいと言われたというのは、これまでも結構多いです。広島、長崎の方たちも、2世とか、その出身だっただけで結婚や就職の際に、いろいろ障害があったと聞いてます。

二ツ川 そうですね。

田中 被爆2世は訴訟問題にもなっているけど、たぶん福島もそうになってしまいます。というのは、アンケートを取ると、 $0.23 \mu\text{Sv/h}$ のところに暮らしていると遺伝的障害が出ると考える住民は、福島県でも30~40%、県外になると60~70%以上です。親は子どもの健康のことを心配していますが、子どものことを本当に心配するなら放射線を勉強して、子どもが将来、難しい事態に遭遇したときにきちっと対応できる親にならないとだめだと言っています

が、その意味を理解してもらうことが難しい。事故当初に放射線被ばくの影響について根拠の無い知識を振りまいた学者とか弁護士とか、マスコミがいるものですから、それが刷り込まれている。事故当初のころに政府も非常に判断がぐらぐらしていました。

二ツ川 そうですね。

田中 昨日は別の会議ですが、行政機関が放射線の知識がないまま規制している。霞が関の役人はもっと勉強する必要があると申し上げましたが、事故当初の恐怖心が、住民にトラウマみたいに残っているから、私たちがいくら言っても、なかなか変わらない。

二ツ川 最初のイメージができていますよね。

ところで、あの状況で、先生が原子力規制委員会の委員長を引き受けるというのは、かなりの勇気が要ったのではないかと思います。

田中 一言で言うと、勇気ではなくてあほだから(笑)。

二ツ川 いやいや。

田中 おっしゃるとおり、やりたい仕事ではなかったですね。それで、事故が起きたときから、原子力に携わってきた者の責任もあって、事故以降、福島にずっと入り浸っていたのですが、そうしたことも踏まえて、私に白羽の矢が立ったようです。何人かの先輩に相談したのですが、いまは他にやる人いないよと言われた。だれかがやらなきゃいけないということもあって、受けたということです。2012年7月30日、私の名前が世間に出たので大騒ぎになった。国会が超党派でまず面接をすることになった。8月1日に衆議院と参議院の議院運営委員会30人ほどの委員がいるのですが、各党派から合わせて30~40ぐらいの質問をその場で受けました。私は、落っこちてもいいやぐらいの気持ちだったのだけど、だめという理由がなかったみたいです。

委員長は認証官だから天皇陛下から辞令を頂きました。それと並行して、国会の承認も要るのですが、自民党政権に替わったため、国会承認は年明けになりました。

二ツ川 その中で委員長をなさったのは大変だっただろうなと。

1 追加被ばく線量年間1 mSvを1時間あたりの放射線量に換算し、自然放射線量分を加えて算出した値。汚染状況重点地域の指定や除染実施計画を策定する地域の要件とする値。



田中 そうですね。更田君²はよく知っていましたが、他の委員は知らない方ばかりです。でも、皆さん何か心に期すものがあったのか、本当にいい関係で仕事ができたとと思いますね。

規制庁のほうも、池田長官³は元警視總監で、どっしりとまとめていただき、次長が現在の環境省の森本次官⁴ですから。スタッフがそろっていましたね。だから、仕事ができただと思います。よく引き受けたなというのは、確かにそうかもしれません。

二ツ川 周りから見れば、大変だろうと。

田中 いや、そのあとで（原発の新規制基準適合性）審査が遅いとかいろいろなクレームをつけたのは、みんなプロ原子力の方たちです。時代の変化とか状況の変化を理解しないで自分の考えを述べられるのですが、結果的には原子力の足を引っ張っているだけだと思います。いまでもそういう人たちが多くですけどね。

二ツ川 反対派からのクレームは。

田中 意外と規制委員会がだめだということはなかったですね。われわれもそういうことについてはずいぶん気を遣って運営しましたから。逆のほうの攻撃はいろいろありましたが……。

二ツ川 委員長として何か特に心がけたことはありましたか。

田中 きちっとした議論をするのは必要だと思います。後腐れのないように納得するまで意見を交わ

すことが大事です。とにかく原子力規制委員会は、針のむしろの上にいたのですから、内部で何か起こったらアウトですよ。わりあい率直に議論したと思います。大島さん⁵は外交官でしょう。島崎さん⁶は地震の専門家でしたが、議論はかみ合いました。

それぞれの専門的知識をきちんと生かしてもらって、一人ひとり責任を持ってもらったし、委員会だけでなく規制庁の中でも、オープンに議論してきたと思います。規制庁は、多くの省庁から集まって構成されているのですが、比較的自由にいろいろなことが議論できます。古い役所になると、どうしてもそういうところがなく、女性職員の中には、規制庁に留まりたいとか、古巣に戻ってもまた戻ってくる者もありました。やりがいがあるんだそうです。

二ツ川 外から見ると、寄せ集めでうまくいくのかなという気もしたんですが、逆にそれが良かったのでしょうか。

田中 いろいろな価値観がありますよね。役所から言うと、旧エネ庁、環境省、文科省が中心ですが、消防庁とか厚労省も何人かいましたし、自衛隊、自衛官の人もたくさんいましたしね。

二ツ川 委員長だった5年の間で、自分としてこれはやり遂げたなというのと、これはもうちょっとやりたかったなということがありましたら。

田中 やることは法律上決められていました。新しい規制⁷を次の年の7月までにはつくらなければいけない。それから、防災の基準を年度内に作成するということは、法律上国会で決められていました。ただし、原子力の安全規制については、信頼を完全に失っていた状況でしたので、最初に、どうするかという議論をだいぶしました。

そこでまず決めたのが、すべての審査と会議をオープンにする。透明性の確保でした。この試みは、霞が関では革命的だったのじゃないかと思いますし、透明性が規制委員会の独立を支える1番の力に

2 更田豊志氏：現原子力規制委員会委員長（2017年9月～）
3 池田克彦氏：元原子力規制庁長官（2012年9月～2015年7月）
4 森本英香氏：元原子力規制庁次長（2012年9月～2014年7月）

5 大島賢三氏：元原子力規制委員会委員（2012年9月～2014年9月）。元国連大使
6 島崎邦彦氏：元原子力規制委員会委員（2012年9月～2014年9月）。元日本地震学会会長
7 新規制基準の改正法の施行は、実用発電用原子炉については原子力規制委員会が設置された日から10か月以内、核燃料施設等については1年3か月以内とすることが定められていた。



なりました。マスコミも非常に分かりやすいから、よかったみたいですね。

二ツ川 見事に当たりましたね。

田中 ええ。あとは、中立的であるとか、科学的であるとか、独立性というのは私に1番求められたことで、政治家とか政治ということに対してはまったく配慮しませんでした。ささやく人もいましたが(笑)。

二ツ川 いろいろ攻撃されることがあったのじゃないですか。

田中 攻撃というほどではないですが、国会に週のうち2、3度行き、5年間で250委員会ぐらいに出席しました。会期中は東京を離れられないし、国会に頻繁に通っていると、そういうささやきはゼロではありませんでした。

でも、ベテランの議員で、「いまのままでいいよ、委員長!」と言う先生もありました。新しい規制の評価はいろいろありますが、規制委員会・規制庁の総力を挙げて10か月でつくり上げた。アメリカもフランスも、外国の規制委員長はとても信じられない、われわれなら3年とか5年かかると言っていました。川内1号機⁸が動いたときは、ご苦労さんというメッセージをいっぱいいただきました。日本の原子力がどうなるのか注視していたようです。

一応やることはやったような気がしますが、今回の規制の1番大きな柱はバックフィット制度です。1回許可を出しますよね。しかし、何か安全上重要な問題、知見が得られたときには、それを遡及適用して、それに合格しないとまた運転ができませんよと要求ができるというもので、世界でもほとんど類例がありません。法律の専門家から言わせると、そんな法律はないそうです。

二ツ川 過去に遡及する。

田中 遡及して新たな規制を過去に適用する。そういう意味では、非常に強い権限があります。その分謙虚にやらなきゃいけないのですが、一人ひとりの力量がそこに追いついているかという、未だなかなかそこまではいかないですね。国の規制はとてつもなく権限が大きいので、謙虚さは重要です。

二ツ川 規制されているほうとしては、そう思い

ますね。

田中 自分自身がそのことをもっと畏れを持ってやらないといけないということはよく言っていました。いま原子力発電だけを見ると、国、政府の姿勢も非常に及び腰です。原子力の割合をできるだけ減らしながら利用することですが、電力の自由化は大きな問題です。

最近では原子力発電所1基つくるのに1兆円近くかかりますから、電力の自由化の中で、そんな大きな投資をするというのは、電力会社にとっても難しい判断です。だから、既存の原子力発電所のペイしそうなものだけ再稼働させるようですが、新設が無いと原子力はだんだんフェードアウトしていくことになります。

その意味で、1番原子力をサポートしているのは規制委員会と言われるのかもしれませんが。原子力発電を国民がどう選択するかはこれからですね。

一方、再生可能エネルギーにも課題があります。FIT制度⁹、再生可能エネルギーの固定価格買取制度というのがあって。キロワット40円だったのが、いまは19円に下がってきていますし、10年間で固定価格の買い取りは終わります。つまり、最初の40円の固定価格はあと2年ぐらいで終わります。そのあとは、おそらくキロワット7円とか8円でしか買い取ってもらえないことになります。そうなったときに、再生可能エネルギーを持続できるかどうか分からない。大規模化すると蓄電池が必要になりますが、蓄電池を入れるといまの技術だとキロワット60~70円になるそうです。それで、キロワット7円とか8円でしか売れなかったら、やれないですよ。そのうえ、量的には限界があって、ある程度のところで限界がくるのではないかという気がします。いま火力が90%以上です。温暖化の問題とかも踏まえて考えないといけないのですが、もっと深刻なのは中東で紛争が拡大したら今度は石油燃料が枯渇するというリスクです。サウジとイラン等は、極めて不安定な状態で、もし紛争が起これば、海峡は全部封鎖されてしまうかも知れません。

エネルギー問題は、国の存続にとって非常に重要

⁸ 2013年7月、新規基準に基づく審査を経て、1号機は2015年8月、2号機は同年9月に再稼働した。

⁹ 2012年に再生可能エネルギーの普及とその発電コストのサポートを主な目的として作られた制度。太陽光発電等、再生エネルギーで発電した電気を一定の値段で国が買い取ることを保証した。



だという歴史的な観点を忘れているように見えますが、その場限りの議論ではなく、もう1回考え直すチャンス、考え直すべきだと思います。

原子力発電を国民がどう受け止めるかは、いまの状況では予断はできませんが。

二ツ川 話は変わりますが、福島についていま思われていることは何かありますか。

田中 私がもっとも腹が立っているのは、放射線防護の規制の基準の不合理性です。たとえば食品摂取基準は、食べ物の半分が100 Bq/kgのものを食べるという前提で、その場合でも、内部被ばくが1 mSv/y 以下になるようにするということです。

実際に福島県で毎年50万件ぐらい食べ物を測っているのですが、主食の食材はここ4~5年有意な汚染はでていません。米は、毎年1,100万俵全量検査して、24年度以降は、1個も検出されていません。ところが、例えば魚でも、100 Bq/kgを超えるものが1品でも検出されると、その種類の魚は捕獲も販売も禁止されています。100 Bq/kgを越える魚は、ほとんど検出されないのですが、福島の漁業は試験操業ということで未だに全面的に解禁されていません。農作物もそうです。

そういう状況はどう考えたっておかしくて、50%が汚染されているという設定は、1%しか出てないのだったら50倍したっていいわけですが、濃度だけの規制を霞が関も福島県もやっている。

いまのような不合理な規制をやっている限りは、福島の復興は永遠にできないと思います。何千件、何十万件も測っていたら、100 Bq/kgを超える検体も確率的に見つかります。農家の人とか漁業者が復興の試みを何かやろうとすると、入り口で禁止され

て、何もできない状態が続いています。

何でそういうことになっているか。0.23 μ Sv という文科省が出した1 mSvの計算式についてもです。1 mSv/y 神話みたいなのがあって。それに、行政がきちんと対応しないし、おかしいと言わないのですね。言わないのは行政だけじゃなくて、その周りにいる放射線防護の専門家と称する先生たちも、みんな国に対しておかしいと言わないのです。

二ツ川 食品も非常に混乱している状況、周りにいっぱい汚染があるというときに、半分は汚染しそうだというのでその基準を決めたけれども、いつまでもその基準でやるということが問題なのでしょうね。

田中 チェルノブイリのときに、ヨーロッパはラップランド地方に対しては6,000 Bq/kgのトナカイの肉まで許可しているのですよ。現実にはそれを食べたからといって、健康障害は起こらないという量的なことまで評価してます。現在は、1,000 Bq/kgになっていますが、日本も現実的に即した規制を行うべきです。

ヨーロッパは、汚染する割合が20%で1,000 Bq/kg、アメリカは10%で1,250 Bq/kgです。日本は、実態として1%以下です。ほぼ0%に近いのに100 Bq/kgのままです。

住民避難もそうです。現存被ばく状況で20 mSv/yを超えるおそれのある地域の人には避難してくださいという基準で、これは時間当たりになると3.8 μ Svに相当します。実際には、3年前ぐらいに大部分の地域は、それ以下になっているのですが、いまだに除染しないところは解除しないということになっています。復興と言いますが、福島市とかいわき市にいて、双葉町とか大熊町を復興することはできません。帰れる人は帰ってきて、そこから復興が始まるのですが、遠くの地域に住んでいたら復興はできません。

結局、福島の復興を妨げているのは、国の判断がきちっとしてないことです。科学的じゃないし、その場限りの判断をしてきたことがあります、それを何とかしない限りは復興はなかなか進まないと思います。

合理的な規制にならないと復興はできませんし、現状の規制は、福島の住民にとってすごいストレスです。農家の人は自分でつくったものを売れないし、漁業者は自由に漁業できないし。



二ツ川 産業が進まないと、復興には繋がらない。

田中 働く場がないから、みんな帰って来れないこともあります。

東京電力の雇用は、関連業者も入れて相双地区の雇用の柱でした。地元自治体は原子力の交付金が大きな収入源でしたが、福島第2原発を含めて全部なくなります。福島県はロボット基地にするとされていますが、ロボットで大きな雇用ができるとは想像できません。廃炉のためのロボットは一般的なロボットでもありませんし。

二ツ川 そうですね。みんなが働けるところが重要ですね。

話は変わりますが、アイソトープのことについてお聞きしたいと思います。最近アイソトープ離れというのがある。その原因には、1つは規制が海外に比べると厳しすぎるのではないかということがあるんですが、そのことはどのようにお考えですか。

田中 この前、原子力委員会の中西友子先生と話をしました。日本は加速器とか放射線利用というのは民生上すごく大事ですが、そこについての認識が非常に薄くて、場当たり的にしか行政が動いていません。最近、やっと JRR-3¹⁰ が規制委員会の許可がでました。かなり前からモリブデンの問題があって、カナダのメイプル炉がだめになって、非常に状況が悪くなった。オランダも古い炉を改良する等頑張っていたけど、やっぱり足りない。日本が大量に消費しているのだから、JRR-3 のような古い炉じゃなくて、政府が新しい炉をつくるべきです。

JMTR¹¹ を改造してモリブデンを製造しようと思って、私も原研にいた当時は努力していましたが、IF 事故が起きて規制基準が厳しくなり、無理になりました。JMTR みたいな大きさを、多目的で、アイソトープ製造とかできる炉をつくっても 400～500 億円です。ところが、加速器も含め、放射線利用をわが国でどう位置づけて、どう支えていくのかという視点を議論する場が無いのです。原子力委員会が議論できる適当な場をつくって、もっと計画的にやらないと、実現しないし、結局は人も育たないことになります。

二ツ川 私も同じように感じています。アイソトープ協会が公益法人になる前は、所管官庁は文科省の量子放射線研究推進室でした。

田中 そう。原研と所管官庁が一緒だった。

二ツ川 アイソトープの利用をやってくれていましたが、いまは日本全体のアイソトープの利用を見る中核がないような気がするのですね。どこかが中心になって、もうちょっと中長期的な計画を立てながら進めていくようなところがあっていいのではないかと。

田中 そうですね。医療利用も多いですよ。加速器は大学の学術研究とか産業利用があります。省庁がまたがっていますので、内閣府の総合科学技術会議の中にそういう部門をつくるべきだと思います。そういうことをしていかなないと、じり貧になりそうな気がしますね。

国のお金が非常に切迫してきているから、大きなインフラ的なものに対する投資が場当たり的なになる。私は、J-PARC の予算を取るため、文科省に何回も出向きました。いずれにせよ、中核になってくれかが一生懸命やらないとできないですね。

原子力利用には、原発、エネルギー利用と放射線利用の2つあって、放射線利用は、国民の健康と生活向上の上で極めて大事だと言っていますが、なかなか定着していません。もう1回アイソトープ利用とか放射線利用について根本から検討し直す必要があるのだと思います。

二ツ川 廃棄物の委員会、RI の医療利用の委員会とか委員会はありますが、それが力になるというか、まとめていくところがないですね。

田中 そうなのです。障害防止法があって、労働安全規制があって、医療法があって、薬機法があって、バラバラです。

二ツ川 そうですね。

田中 どこかで整理してやる必要があります。政策を推進する側と規制する側で、規制する側は規制庁がもう少しきちっとやっていかなきゃいけないのかもしれないけど、推進する側にも問題がある。廃棄物だって、研究所等廃棄物は原子力機構がやることで法律ができて、積み立てているのだけど、進んでいません。

アイソトープは素性が分かっているのだから、クリアランスの問題では、もっと科学的に議論すれば

10 日本原子力研究開発機構の研究用研究炉。変更に係る設計及び工事の方法の認可申請書を受理（2018 年 10 月 12 日）

11 日本原子力研究開発機構大洗研究所にある材料試験炉



いろいろな方法があると思います。それをどこがやったらいいのだろうということです。

二ツ川 そうですね。いまの障害防止法のクリアランスは、規制法の方法をそのままに持ってきているわけです。規制法では、原子炉でUが核分裂を起こして、核種が発生するのですが、RIはもともと決められた核種しか使わない。量も決まっているし、核種も決まっているのですから。

田中 核種も半減期も決まっているし、仮に長い半減期のものであっても、核種が決まっていれば当然素性、挙動も分かる。どこが旗を振るのか。

二ツ川 文科省だと思いますけどね。

RIだと本当に推進をしていただける中核がどこなのかははっきりしない状況ですね。

田中 文科省が難しいならば原子力委員会でやってもらえるのかな。そこからスタートして、行政に落とす。

二ツ川 最後になりますが、いまの先生のお立場から、アイソトープを利用している協会の会員とか主任者に対して提言といいますか、ここにもう少し力を入れたらよいというようなことがありますか。

田中 特に申し上げることはありませんが、もっと発信しないと、アイソトープの利用の存在、放射線利用の重要さというのが皆さんにあまり理解していただけていない。医療関係だったら、放射線抜きにほとんど成り立たないですよ。

先日、飯舘村に東京と福島医学生が40人ぐらい来て、そこで話をしました。医者のお卵ですから、いろいろな質問がありました。医療なんてほとんど放射線ばかりじゃないですか。

二ツ川 検査とか、治療にも入ってきましたからね。

田中 治療も。だから、そういうところをもう少しアピールできるようになるといいですね。そのためにはどうすればいいかということでしょうが、放射線取扱主任者だけでなく、みんなで努力したほうがいいと思いますけどね。

二ツ川 ありがとうございます。いろいろなところから放射線の重要性をアピールしていくことが必要なのですね。

田中 いま、日本は福島というものを抱えたことによって、本当の放射線防護、リアリスティックな放射線防護はどうあるべきかというのをもっと世界に発信しなきゃいけないのです。発信してもらいたいと思っています。日本というのは、常に外国からの知識の受け売りで来たという歴史的習性があるものだから、自分から国際的に発信するということがない。でも、国際的に言うとき、いま日本はどう思っているのかというのを発信してもらいたい。それが国民の放射線に対する理解促進、レベルアップに繋がるのだと思います。

二ツ川 そうですね。

田中 あとは、教育のプロセス、中学、高校で放射線教育がほとんどされてない。空港でゲートをくぐるときのX線と飛行機に乗って被ばくする放射線は違う。じゃあ、これはどこから来ているのかとか、子どもたちにとっては結構興味が広がるのです。

二ツ川 実体験が重要なわけですね。

田中 はい。自分の被ばく線量ですから。例えば葛尾村に行っても、シアトルに行っても、あまり差がないというのが分かる。そういうこともありますので、難しいけれども、きちんと理解してもらう必要があると思うし、もっと正面からやったらいいと思います。私は放射線が好きだからそういうことを言うのですが、昔JCOの事故のときに、近くに行ったときに中性子は怖くないですかと言うから、中性子に見えるから怖くないと言いましたが……。

二ツ川 えっ、中性子が見えますか。

田中 見えるという実感ですよ。測定器を持っていけば、量的に見えるから。みんながそう感じるようになっていけば、こんな問題はとっくに片付いているのだと思いますけど。

廃棄物だって、放射線、放射能は普通の人から見るとお化けなのです。

二ツ川 正体が分からない。



田中 そうです。この前の学生なんかでもそうですが、放射能はうつるものなのか、病原菌だと思っているのです。

二ツ川 医学生でも、まだそのようなことを言うのですか。

田中 そういうレベルですよ。そういう中で、放射線被ばくの健康影響とかはなかなか通じないところがあります。だから、絶対ゼロじゃないとだめだという主張がある。リスクゼロは非科学的な考え方で、そんな世の中はどこにも無いと学生には言うのですが、キョトンとしていて分からないです。

二ツ川 日本は、リスクを評価することに普段から慣れてないですからね。

田中 慣れてないですね。ロジカルじゃないから、確率論的な考え方は非常に下手ですね。

事務局 事務局からの質問ですが、先生ご趣味は。

田中 趣味ですか。私は、どっちかというアウトドアです。サッカーを長く40歳ぐらいまでやっていて、テニスをやっていて、山登りは学生時代からやっていて、いまでもぼちぼち登っています。

事務局 私の大学の同期が、福島飯館村の役場で働いているのですが。アドバイザーとして、そういった役場の方たちと定期的なミーティングもされるのですか。

田中 特にはありませんが、役場にはしょっちゅう行って、村長はじめ、いろんな方と話をします。

飯館村は、外からボランティアとかいろいろな人がいっぱい入ってきますね。私もその1人かもしれませんが。先日、お医者さんと医学部の学生が老人ホームを訪ねてきましたが、何かというとはかの村に行くよりは飯館村に来るようです。

二ツ川 先生と福島との最初の繋がりは何ですか。

田中 事故が起きて、5月に現地へ行って、飯館村でもっともひどく汚染された長泥地区で除染を始



めたのが始まりです。とにかく桁違いの線量で、空間線量でも10～15 $\mu\text{Sv/h}$ もあったし、土壤汚染も数十万 Bq/kg ぐらいありました。このままでは住めないから、家の周りだけ除染しなきゃというので除染を行いました。

伊達市と飯館村と川俣町でアドバイザーをやっていて、そのうち県のほうからも呼ばれていろいろなところで行動していました。

もともと私は福島市生まれということもあります。

二ツ川 先生、本日はお忙しいところ、インタビューをお引き受けいただきありがとうございます。

・ ・ ・ ・ ・

インタビューを終えて

福島事故の混乱の中、火中の栗を拾った時の気持ちを、また、核燃規制と放射線の規制が一本化されたことによる放射線規制への影響を聞いた。委員会と同様、朴訥で誠実に語っていただいた。5年間の激務を終えても、放射線が好きなのだと、今でも福島で放射線に取り組んでいる。福島の実証試験の結果がでて、皆が一刻も早く安心して暮らせるようになることを願ってやまない。(二ツ川)